

田舎の月に愚痴を言う

ジュール・ラフォルグ

市川 裕見子 訳

ああ！　きれいな満月だ、
金満家みたいにまるまるとして！

遠くで狩り終了のラッパが鳴る、
通り過ぎるのは助役どのだ。

正面ではチェンバロが鳴っている、
一匹の猫が広場を横切る。

田舎が眠りに落ちるところだ！
最後の全和音を奏してる、

ピアノがぴたりと窓を閉じる。
いったいぜんたい何時だろう？

静かな月よ、なんたる流謫の身か！
神の御心のままに、と言えというのか？

月よ、ああ酔狂な月よ、
どんな土地にもかならず顔を出す、

きのうはミズーリ川を見ただろう、
そしてパリの街中も、

ノルウェーの青いフィヨルド、
極地も、海も、何もかも、

幸運なる月よ！　かくして君は
今この時に乗り物を見る、

あの人の新婚旅行のね！
二人はスコットランドに向けて発ったのだから。

もしもこの冬、あの人が私の話しを
真に受けてたら、今ごろどんな図となったことか！

月よ、流浪の月よ、
言うこととやることを一致させなきゃなあ。

ああたっぷりの夜！　死にそうだ、
心まで田舎になった！

そして月は、ばあさんたら、
耳に綿を詰めてやがる。

‘*Complaintes* (嘆き節)’ (1885) より

ジュール・ラフォルグ (Jules Laforgue, 1860-87)

南米ウルグアイの首都モンテヴィデオで生まれた。古いブルターニュの家系の出である。結核におかされ、27才の若さでパリで亡くなっている。本詩は生前に発表した二冊の詩集の内、早い方の詩集に収められている。

なお、翻訳にあたっては、Jules Laforgue, *Poésies complètes*, Le Livre de Poche, 1970 を用いた。